

論説研究

ゾムバルトの資本概念

新川 傳介

(一) 序 論

近代社會の經濟的體制を決定するものは資本の自己運動の形態である。従つて、運動の主體たる資本とは何であるか、資本は如何なる運動形式をとるか、更に資本は如何なる根據を以てかゝる運動形式をとり得るのであり、又、とらねばならないのであるか、等々の問題が明瞭に理解せられない限り、『資本主義經濟』と稱せられる近代社會の經濟的體制を理解することは不可能である。

本論文はこの問題に關するゾムバルトの説を、彼の不朽の名著『近代資本主義』(Der moderne Kapitalismus)特にその第三卷『高度資本主義』を中心として検討せむとするものである。

乍然かゝる研究はゾムバルトに於て始めて試みられたものではなく、既にケネーに於て一應基礎づけられ、マルクスに於て大成せしめられてゐるのであつて、年代的に見ればゾムバルトの研究は陳腐に屬するものであるが、特に今、彼を検討せむとする所以は、自ら資本概念に關して古典派學者、特にリカルド、マルクスの說に最も近いと述べてゐる彼の資本概念が、如何なる點に於て之等諸家の說を發展せしめてゐるか、或は諸家の說を繼承するに不充分であるかを見むがためである。

(二) 資本とは何であるか

資本とは何であるか。ゾムバルトに依れば、資本とは實質的基礎として資本主義的企業に役立つ交換價值の合計であるが、(註二)彼は個別的資本の算術的合計を以て社會の總資本とするのである。彼はこれを次の如く分析する。

(a) 資本概念は『機能概念』(Funktionsbegriff)であつて、一定の目的關聯に於ける交換價值の合計と云ふ關係を示すのであるから従つて、何等かの物財を示す『物質概念』(Dingbegriff)ではない。換言すれば、物財は單に資本の象徴にすぎないのであるから、物財の數と同數の象徴が存在するのである。例へば貨幣、生産手段、生活手段等は是であるが、乍然これら總ての

ものは資本たるの可能性をもつものであつて、必ずしも現實に資本ではないのである。即ち、これらの物財は資本の現象形態(Erscheinungsformen)或は資本の外衣にすぎないのである。

(b) 資本概念は歴史的經濟的概念である。即ち資本概念は一定の經濟制度、即ち資本主義的經濟制度の目的關聯から構成せられたものであるから該概念は唯だ資本主義的經濟制度にのみ妥當するのである。従て資本主義的思惟の下に業務財産が獨立化された時以後初めて存在するのであつて、それ以前に於ては生産手段及び生活基金といふ概念は相互に獨立して存在してゐたのである。

(c) 資本は資本主義的企業を前提とすることに依つてのみ可能であるから、乍然資本主義的企業は資本を前提とすることによつてのみ可能であるから、資本主義的企業に基いて資本概念を説明することは、一見“idem per idem”による説明のやうに見えるけれども、資本主義的企業といふ概念は全然資本概念を借ることなくして、完全に獨立に規定されるから、實質的には少しも差支へないのである。(註二)

乍然、一應かく規定された資本概念は、ゾムバルトによれば尙他の重要な缺點をもつのである。即ち、その最も重要なことは一企業の資本がそれに先行する生産段階の餘剩價值を實現するに役立つ限りに於ては、一般に資本は資本利潤をも含むといふことこれである。

以上資本を定義した彼は、次にこの定義をより明瞭にするために諸家の資本の定義をあける。

第一に資本を唯だ利潤のみと關聯させるもの、即ち、シーニオアの『經濟學者は利潤をあけるものは何でも本來資本と名づけられてゐるといふことに一致してゐる』或は、マクレオ下の『資本とは利潤を得むがために使用せられる經濟量である』等々の定義は之れに屬するのであるが、乍然これ等が利潤といふ語を資本主義的企業の収益と解すれば正しいのであるが、若しこれを營利財産の収益であるとすれば間違ひであるとするのである。(註三)

第二の種類のものとして、資本を勞賃と關聯させるものをあける。即ち、ジェヴォンスが固定資本に對立させて本來的資本を以て『貨幣の過渡的形態、或は食物及び其の他の生活必需品の現實的形態に於ける勞賃』(the wages of labour either in its transitory form of money or its real form of food and other necessities of life)であると規定してゐるのに對して、これは餘剩價值を顧慮せず、又投資を除外する點に於て不充分であるとする。

第三に資本を企業家と關聯させて考へるもの、即ち、シユムペーターが『各時點に於て企業家が自由に處分し得る貨幣若くは支拂手段の總計』或は『企業家の支拂能力』と定義してゐるのに對して、若し、企業家といふ概念が『創造的な』經濟指導者といふことに制限され

てゐないならば、この定義は或はあてはまり得るかも知れないのであるが、乍然、傳統的に活動しつゝある株式會社も確かに亦資本をもつのではないだらうかと云ふのである。

(註四)

次に、ゾムバルトは更に資本概念を歴史的に検討し、資本概念の濫觴はミハエル・ハイニツシユの研究が示すやうに、Capita という語が家畜頭數 (Stammvieh) を意味するものであるか否かは兎も角として、古代及び中世に於ては一般に貨幣貸附の元金が資本であつて、古典派に於てもこの見解は唯だ貨幣の代りに交換價值の合計が置き換へられたにすぎないのであり、従つて本質的には全くこれと同様であるとするのである。(註五)

乍然、ゾムバルト自ら『私の資本の定義は古典派の見解特にリカルド及びマルクスの夫れに最も近い』(註六)と述べてゐるやうに、古典派に就ては彼は自ら『師匠』と呼ぶその始祖アダム・スミスの定義を掲げ、以てこれを詳細に検討せむとするのである。

『彼の全蓄財は二つの部分に分れる。一つは彼が其處から収入を得やうと期待する部分で、これは資本と名附けられる。他は彼の直接消費に供せられる部分である。……一國若くは一社會の總蓄財はその全住民又は全員の有する總資本と同一である。従つて、自らそれは同じ三部分に分かれ、夫れぞれ別個の職能又は役目を有つ』(註七)

ヅムバルトによれば、この概念決定の中には、資本は『生産手段』若くは『生産された生産手段』と同一物たるべきであるといふ筈で、永い間獨逸の教授達の文獻を支配し、今日に於ても亦時代遅れの教科書に於て見出す處の資本に關する見解への萌芽が既に存在するのである。即ち『三つの生産要因』即ち自然、勞働、資本の説はこのスミスの概念と誤つて結びついてゐるのである。然らば、何故かくなるのであるか。

彼によれば、若しスミスのやうに、『直接的消費のための蓄財』(Stock for immediate consumption)を資本と對立させるならば、資本が『生産のための蓄財』(Stock for production)であるといふことは自明のことであり、而してそれは亦古典派の見解でもあつたのである。古典派は彼等の概念決定に於ては資本主義的生産方法(かくして賃銀勞働者の生活手段、即ち所得財をも亦その中に含む)から出發するのであるが、生産一般と資本主義的生産とを同一視する限り、資本と生産基金とする概念決定を以て充分であるが、乍然、十九世紀の初葉、獨逸がまだ本質的には手工業であつた當時に於ては、生産と資本主義的生産とを同一視することは不可能である。これがために生産を歴史的、經濟的概念として理解することを斷念し、一般生産論を創造せむと努力したのである。乍然、これがためには、生産基金を以て所得財を包含せしむることは不可能であつたから、その概念を『生産すべく定められた財』(zur Produktion

bestimmten Gütern) に制限したのである。而してそれは正に生産手段であり、より嚴密に言へば勞働手段なのである。

然るにかゝる不合理な概念決定の結果が、破壊的であることは、ゾムバルトの設例によれば、それが『生産された生産手段』であるとの理由を以て、『私のペン軸』を資本と名附けるにも拘らず、他方、株式會社の資本を以て、それが勞賃のために、且、それと共に所得財のために使用せられる資本額は『生産された生産手段』から成立つてゐないとの理由の下に、最早資本ではないと規定せざるを得なくなつたのである。

然るに、かゝる資本概念の混亂を最も明瞭に解決したものはロードベルトウスである。

彼は資本を一般的經濟的 (allgemein ökonomisch) なるものと、歴史的經濟的 (historisch-ökonomisch) なるものとに分けたのであるが、ワグナー及びウィッテルスヘーフェルはこの方法に従つて、資本を客觀的資本と主觀的資本とに分け、更にベーム・バウエルクは社會的資本と個人的資本とに分けたのである。乍然、ベーム・バウエルクの分類は、資本を誤つて社會經濟的意味に解するものと、個人經濟的意味に解するものとの別を生じ易いといふ缺點を有つのであるが、兎も角もこれまで資本概念を以て、本質的には、一方に於ては生産された生産手段と解し、他方に於ては營利財産であると解してゐたのである。(註八)

ゾムバルトは乍然この分類は更に修正されなければならないとする。即ち、『生産された生産手段』も『營利財産』も共に經濟現象を説明するに不充分であるとするのである。例へば、主觀的客觀的資本の分類法に於ては、客觀的資本には少くとも尙生計基金(Subsistenzmittelonds)が附加されねばならないのであり、又主觀的資本に於ても『營利財産』と彼の意味に於ける資本とは異なるのである。何故ならば資本主義的企業の根底に存する實體と、金貸によつて貸附利子を生ずる貨幣額とは一般に明瞭に分離して考へられるからである。

然らば、かく異つてゐる概念を如何に呼ぶべきであるか。即ち之れら總ての概念に夫れぞれ異つた形容詞を附して共に『資本』とよぶか、或はその一方だけを資本と呼び、他方には別の名稱を與へるべきであるか。

ゾムバルトは後の方法を探るのであるが、彼は更に資本の語を四つの概念の一つにのみ用ひ、他の三つには別の名稱を與へむとするのであつてその理由としては、

(a) 前の方法に於ては更にそれらを總括し包含する上位概念たる資本が存在しない。

即ち歴史的な又經濟的な範疇としての資本、或は社會的資本と個人的資本、或は客觀的資本と主觀的資本等に於ては、更にかゝる制限的形容詞を有たない資本とは何を意味するのであるかを明かにせねばならないにも拘らず、是を明かにすることができないからである。

(b) ズムバルトの三つの概念とは生産(労働)手段、生計手段、基金、及び營利財産であるが、彼
はこれには資本の名稱を與へず、第四の概念としての資本主義的企業の實質的實體のみを
資本と呼ぶのである。(註九)

註一、近代資本主義、第一卷、三三四頁、第三卷二二九頁、乍然、資本概念を詳細に取扱つてゐるのは第三卷であつて、
第一卷は一應簡單に定義してゐるに止まる。

註二、第三卷二二九—三〇頁。

註三、福田博士も亦資本の本質を以て利潤にあるとされてゐる。改造社經濟學全集第二卷六一八—一九頁參照。

註四、第三卷一三〇—一頁。

註五、Cf. Edgar Salin: Kapitalbegriff und Kapitallehre von der Antike zu den Physiokraten, Vierteljahrsschrift für Sozi-
al- und Wirtschaftsgeschichte, 23. Bd. Heft 4.

註六、第三卷一三二頁。

註七、A. Smith, Wealth of Nations, Book II, Chap. 2, 譯文は大體春秋社版青野季吉譯上卷三二二頁による。

註八、第三卷、一三二—三頁。

註九、第三卷、一三三—四頁。

(三) 資本を如何に分類するか

以上資本の本質を明かにしたズムバルトは次ぎに資本を次の三方面から分類する。

- (a) 資本形成の發展段階に従つて、
- (b) 資本の現象形態に従つて、
- (c) 資本の活動範圍に従つて、

(a) は現實資本 (Aktuelles Kapital) と潛在資本 (Potentielles Kapital) とに分かれるのであるが、前者は既に一企業の實行に役立ち、現在活動しつゝある資本であり、後者は既に所得から解放せられ資本として投下されむとしつゝある貨幣額、換言すれば、前者は現在、現實に資本としての機能を果たしつゝあるもの、後者は資本たる可能性は有つてゐるけれども、現實に資本としての機能を果たしてはゐないものを指すのである。

(b) は更に次ぎの三つに分けられる。

(イ) 貨幣資本と物財資本。これは資本が採る形態に従つて分類せむとするものであつて、ゾムバルトによれば貨幣形態は資本がとる最初の、而して又常に最後の形態なのである。後者は物財の種類と同數の各種資本があり得るのであつて、原料品から完成品、生産財から消費財まで悉くこれに包含せられるのである。

(ロ) 人的資本と實質資本。これはマルクスの所謂可變資本と不變資本とに對應するものであつて、前者は勞働力の購買に役立つ資本であり、後者は原料、助成材料、勞働手段等、一般

に生産手段の購買に役立つ資本を指すのである。

(ハ) 固定資本と流動經營資本。これはスミス以後、一般に慣行された資本の分類方法であつて、一生産期間に資本がその全價值を價值増殖行程の中へ入り込みしめるか否かによつて區別せられるのである。

(c) は生産第一次資本と分配第二次資本とに分類されるのであるが、前者は最廣義の物財生産、即ち經濟的循環を繼續せしむるに役立つ資本であつて、その投資領域に従つて、生産資本、商業資本、運輸資本、銀行資本等々に分かれるのである。換言すれば、企業資本及び貸附或は參與資本に於ける業務上の危險に對する地位に従つて、かくして損益に完全に關與するか、或は、その額に従つて一定の謝禮 (Vergütung) のみがそれに歸屬するかに依つて分かれるのである。

後者は、生産行程に參與することなくして該資本の所有者に所得を得せしめる資本であつて、その職能は貨幣形態に於ける現存物財が一經濟から他の經濟へ推移することにある。従つて、純粹の形態に於ては分配資本は恐らくは賭博或ひは馬券の資本として現はれるのである。而して抵當貸附業務質屋業務等も、それらが消費信用を許容する限りに於て、或は生命保險もこれに屬するのであるが、乍然、火災保險、盜難保險の資本は生産資本であるとす

るのである。(註一)

乍然、この分類に於て商業資本を生産資本とするのは當らない。何故ならば、ゾムバルトが分配資本の職能と規定したものが、反つて商業資本の職能であり、又、銀行資本を生産資本と規定すれば、銀行資本の重要な活動領域たる抵當貸附業務に使用せられる資本を分配資本とするは誤りである。何故ならば、銀行の單なる貸附業務は自ら生産行程に參與することなく、又銀行に依つて信用を與へられた者が該信用を如何に使用するも、銀行は夫れに關係なく、一定の利率に依つて算定せられた利息を收得するを常とするからである。

以上、種々の見地から資本を分類したゾムバルトは、次に嚴密な意味に於ては資本でなく、従つて右の分類の何れにも屬さないものではあるが、乍然多くの人に依つて誤つて資本と見做されてをり、且、多くの特徴に於て眞正の資本と共通であるとの理由を以て、屢々資本と混同されてゐるものを擧げる。即ち、利子を收得する權利は與へられてはゐるが、資本主義的企业に基礎として役立つことのない貨幣額之れである。而してゾムバルトによれば、これは單に虚構の大きさにすぎないのであつて、現實に何等の價值とも相應することなく、唯だ、計算上、利子の資本化から發生し、従つて利率或ひは利潤率、或は資本化關係の高度如何に依つて異なるものである。

この所謂『虚構資本』(fictive Capital)に就ては、既にシスモンヂが指摘してゐるのであつて、

『公債とは年所得中から債務の償却に取除け置く部分を代表する一の想像的資本 (capital "imaginaire") に外ならぬ。それと等額の一資本が支出されてゐる。これが借入上の一分母として役立つ。が公債はこの資本を代表するものではない。なぜならば、この資本は最早存在してをらぬからである。けれども、産業の運用に依つて新たな富を作り出さねばならぬ。この富の一部は右の支出された富の貸附者たりし人々に支拂ふために年々豫め取除けて置かれる。それは右の富を生産した人々の手から租税として徴收され、國家の債權者たる人々に支拂はれるのである。而してこの國に於ける資本及び利子間の習慣的比例に従つて、一の想像的資本が、これ等の債權者たちに歸屬すべき年所得の源泉たり得る資本と同じ大きさのものだと假定される』(註二)

マルクスに於ても

『利子附資本なるものは總じて凡ゆる錯亂した諸形態の母であつて、それは例へば銀行業者の觀念に於ては債務をも商品として現はしめ得るのであるが、國債に於ても同様に、一のマイナスが資本として現はれる。ところで、これより斯かる國債上の資本から目を轉じて勞働力を考察することにしよう。勞銀はこの場合、利子として理解され従つて勞働力なる

ものはこの利子を齎すところの資本として理解される。……』(註三)

乍然ゾムバルトはこれを虚構資本と呼ぶことに賛成せず、若し資本の語を用ふるとすれば、消極資本 (negatives Kapital) 或は受動資本 (passives Kapital) と呼ぶべきであるが、能ふ限り資本の語を除去して利子基金 (Rentenfonds) 等とすべきであるとするのである。

而して、彼は資本とこの所謂虚構資本とを次のやうに區別する。

(a) 公的團體(政府及び市町村等)及び私的團體が消費の目的を以てする借入金は、該團體が夫れ自體資本主義的企業でない限り資本ではない。何故ならば、該借入金は資本主義的企業の根底に存在する實體でなく、單に貸附によつて貸附利子を得る貨幣額にすぎないからである。(註四)

(b) 利潤を生すべき企業、或は地代を生ずる土地の購買に使用せられる貨幣額は資本ではない。

(c) 總ゆる種類の有價證券の購買に役立つ貨幣も同様資本ではない。

(b) と (c) とが一見資本であるかの如く見えて事實然らざる理由として、

これらの場合には資本と共にその額が現はれるのであるが、該貨幣額の投下によつて一産業企業の株式或ひはこの株式の總計が一人の手から他の人の手に移るとしても、該企業

が據つて以て基礎づけられ、經營せられる資本には少しの變化もないからである。即ち確かに一貨幣額は支出され收得されるのではあるが乍然該貨幣額の授受は單に該企業の關與權 (Bezugsrechte) が他に移るにすぎないからである。

而してこの場合は、ゾムバルトが『公債の機能變化』(Funktionswechsel der Anleihen) (註五)と稱する過程から生ずる特殊性を示すのであつて、『資本主義的生産が擴張する程度に従つて、公共團體が所得する貨幣は確かに再び資本に變化するのであるが、それにも拘らず、それはより早く極めて廣い範圍に於て、直接に消費の目的を以て使用せられるか若くは手工業の方へ流入するのである。特に、公債が公共團體の公共建築物、交通業へ資本として投下せられ、或は瓦斯水道電氣事業へ投下せられる場合の如きはこれであるが、この場合には貸附された貨幣は殆ど常に資本關係へは入る』(註六)のであるが、乍然、この場合と雖も概念的には區別して考へらるべきであることは、例之、ゾムバルトの設例によれば、上部シレジアに於ける熔鑛業、バイエルンに於ける紡績業は伯林の取引所で、その株式を賣買するために流通される貨幣額の一ペニーをさへ見ないのであるけれども、若しその流通貨幣額を受領者が資本主義的目的のために、即ち、或は資本主義的企業を創設するか、或は他の資本の擴張に使用すれば、其時初めて該貨幣額は資本となるのである。(註七)

註一、第三卷一三五—六頁。

註二、Simondi: *Nouveaux Principes* II. p. 280. エンゲルス版、資本論第三卷下、一四頁下註、邦譯改造社版、一八頁の引用による。但し、資本論の引用と、ゾムバルトのあげたものとは、頁數に於て相異してゐる。原文を照合し得ないから、暫く資本論の頁數に従ふ。

註三、資本論第三卷下、エンゲルス版三頁、高島譯改造社版七頁。但し虚構資本を取扱つてゐる個所は其外に第三卷下、改造社版一八頁及び三四六頁（エンゲルス版三四二頁）がある。

註四、第三卷一三三頁參照。

註五、第三卷一六九頁。

註六、第三卷一六九頁。

註七、第三卷一三七—八頁。

(四) 餘剩價值とは何であるか

資本主義的生産の意義は利潤 (Gewinn) であるが、然らばその利潤とは何であるかを明らかにすることが本節の目的である。

ゾムバルトによれば、利潤とは過剩 (Überschuss) であつて、前貸された資本が増加して出發點へ復歸する場合、資本が増殖された (vervetet) といふのであるが、今、これを一社會の全資本に就て考へる時、この増加分を餘剩價值 (Mehrwert) と言ひ、個別的資本として觀る時、これを利

潤(Profit)と言ふのである。従つて、餘剩價值の生産とは、一生産期間に生産された全所得財の交換價值が賃銀労働者階級の受ける報酬即ち勞賃或は勞働力の交換價值(價格)即ち賃銀基金よりも、より高いことを意味するのである。(註一)

然るに、労働者階級の受取る勞賃が社會的労働の全所得よりも、より少いといふことは、所謂資本主義的經濟の本質をなすものであるが、ゾムバルトによれば、資本主義的經濟に於ては全所得は生産に必然的に參與する全要因の生産物であるが故に、即ち、企業家資本家及び労働者は悉く生産の要因として生産物の生産に參與するものであるが故に、而してこの經濟をこそ資本主義的經濟と言ふのであるが故に、労働者階級が彼等の生産した價值よりも、即ち彼等の労働所得よりもより少く得るといふことは、かゝる分離し得る額なるものが存在しないのであるから、全く無意味なのである。

従つて、彼は一定の經濟的必然性の成果によつて生じた關聯の中へ、別個の道德的な要請(Postulate)を入れむとする『經濟の倫理化』(Ethisierung der Wirtschaft)を以て極めて明瞭な事實を反つて曖昧にするものとして斥けるのである。何故ならば、資本主義的生產方法並びに分配方法の正常性に關する道德的な問題は、資本主義的刻印のない經濟は可能であるか否か、或は又、望ましきものであるか否か、といふ實踐的、政治的問題と同様に、資本主義的經濟を

理解せむとする認識問題を混亂せしむるものだからである。(註二)

然らば、資本主義的經濟の本質的成分であり、又全資本主義の前提をなす餘剩價値の存在理由は如何なるものであるか。

彼はその理由として次の三つのものを擧げる。

(a) 指導的勞働の分化、及び技術的に協働せざる諸個人に歸する社會的所得分の分離を可能ならしむる社會的勞働の一定の生産力の程度、

(b) 人口が資本家、企業家及び無産の勞働者に事實上分れること、

(c) それによつて餘剩價値が實現される處の經濟の市場に於ける結合と市場に於ける價格形成による所得分配分の自然主義的決定、

而して、この場合餘剩價値は、自由に行はれる流通によつて、賃銀勞働者階級と資本家階級との經濟的勢力關係の表現物として、即ち外觀的な對立物たる『勢力』(Macht)と『經濟法則』とを自己の裡に統一する概念として考へられた勢力關係の表現物として現はれるのである。(註三)

然らば、この餘剩價値は現實的には如何にして形成されるのであるか。

一般に勞働者階級によつて生産せられる財は具體的な形象をもつ感覺的な存在である

がゾムバルトはこの所得財を『純粹數量』(reine Menge)として理解するのである。即ち、財を夫れぞれ物理的な性質を異にする、多様性として、或は主觀的な價值測定の方法によつて、客觀的に把握することができ、且算定することができる『量』が發生し得ると考へるのでもなく、財の望まれたる經濟的大きさ (gewünschte ökonomische Grösse) としての價格表現が、その存在に於て量として現はれるといふことに基くのである。

然らば財を『純粹數量』として決定する根據となるものは何であるか。

ゾムバルトによれば、『最も確實に目標へ到達するものとして、舊い勞働價值説が吾々に示した處の幾度も通つた途が常に尙示される』(註四)のであつて、勞働價值説の當然の歸結として、經濟財は一定の常に唯だ數量としてのみ考へられた勞働の支出として、即ち、財を以て人間勞働の所産であり、而も唯だそのみのものであると考へることによるのである。

乍然、この勞働の支出が測定し得べき大きさであるといふことは勿論國民經濟學の諸問題を解決するに必要であると考へられた一の假定にすぎないのであるが、社會的な勞働の支出は勞働時間を以て測定されるのであり、この大きさが『價值』(Wert)の語を以て示されるのであるが、乍然價值は單に勞働の支出の大きさを示すのみであつて、これ以外に何等の不思議なこれに附隨する思想とも結びつくことはないのである。(註五)

而して、この全勞働支出は次の三つのものゝ構成に奉仕するのである。

(a) 勞働者階級の所得財、

(b) 資本家階級(企業家階級を含む)の所得財、

(c) 右兩者の生産に必要な勞働手段の生産、

(但しこの場合には資本主義的生産關係の『類型的』純粹性を前提とすることは自明的である)

然るに(c)は(a)と(b)とに關係あるものとして計算せられるが故に、唯だ財の二群團、即ち兩階級の所得財のみが、全勞働支出を分つことゝなるのである。

今、勞働者階級の所得財を生産するに役立つ勞働支出を a とし、資本家階級の所得財が生産せられる勞働支出を m とし、全勞働支出を w とすれば次の式が成り立つのである。

$$w = a + m$$

従つて $m = w - a$

然らば、本節に於て明かにせらるべき餘剩價值の高さは如何にして決定せられるのであるか。

ズムバルトによれば

(1) 餘剩價值の高さは同一事情の下に於ては、支出せられた社會的勞働量即ち、 w の大きさに依存するが故に、前式に於て、 $w \parallel 40$ 、 $a \parallel 30$ とすれば

$$m=40-30$$

(2) 餘剩價值の高さは同一事情の下に於ては a と m との關與關係 (Anteilsverhältnis) によつて決定する。

(3) 餘剩價值を示す財の量は勞働の行爲能力によつて決定せられるのであるが、行爲能力は一方に於ては三つの可變量即ち、勞働の生産性、その強度及び勞働の經濟性に依存するものであり、而も、これら三つのものゝ大きさは更に自然的な又社會的な事情によつて決定されるのである。(註六)

乍然、これは或る一時點に於ける餘剩價值の高さを決定するものであつて、經濟の推移に伴つてこの餘剩價值が現實に流動する場合、即ち一時點に於ける餘剩價值の高さと、他の時點に於ける餘剩價值の高さとの間に如何なる相異が生ずるか、而して餘剩價值の高さの相異は如何なる傾向を以て推移するか、の問題が考察されねばならないのであるが、ゾムバルトは、之に就ては餘剩價值の低下と、餘剩價值の上向との互に矛盾する見解のあることを指摘し、前者を以て資本主義的立場より見て悲觀主義的見解と名附けて、多くの古典派學者、特

にリカルドと彼の後繼者バスキアとを擧げてをり、後者を以て、樂觀主義的見解であるとして、多くの社會主義者、就中、マルクスを以てその代表者であるとするのであるが、ゾムバルトの解する處によれば、この見解の相違こそ國民經濟學に於ける古典的體系と社會主義的體系との最も本質的な相違なのである。彼の例示によれば、リカルドに就ては

『されば、利潤の自然的傾向は下降に在る。何となれば、社會と富との進歩に連れて、食物の追加量は益々多量の勞働を犠牲にして取得せられるものだからである。』(註七)

又、これと對立するものとして、マルクスに就て、

『勞働生産力は科學と技術との不斷の發達につれて絶えず増進してゐるのであるが……勞働力緊張の増進といふ單なる原因に依つて自然的富の利用が増大されると同様に、科學や技術の發達により、機能資本はその與へられたる大小から獨立した伸張力を附與されることになる』(註八)

乍然、ゾムバルトはこれらの二つの理論に對し、餘剩價值の一定の發展傾向を最初から、一般的な理性の推論に基いて、例へば、演繹的に確證する如く、論證せむとすることは不可能であるとし、前に餘剩價值の高さを決定する場合の根據となつた、勞働の生産性、その強度及び勞働の經濟性が歴史的に變化する可變物であるといふ理由の故に、理論的には、この三つの

可變物の形成或は結合の可能性が多いやうに、餘剩價值の高さに就ても亦極めて多くの發展の可能性が存在するとするのである。従つて、ある一定の事情がある一定の方法で形成されたといふこと、かくして又、ある一定の事情は一定の方法によつて或は形成せられるのであるといふ前二者の主張は全く異つた蓋然的な確證に基いて發展傾向を見むとするものであつて、従つて、餘剩價值の高さを決定する要素たる三つの可變物の結合關係の如何によつて、幾多の發展傾向が有り得るとする主張とは全く別物とならざるを得ないのである。これがために、餘剩價值の形成の傾向を見出すことは不可能であるとされ、歴史的には統一的發展及び統一的發展傾向は存在しなかつたとされるのである。(註九)

註一、第三卷一三九頁。

註二、第三卷一四〇頁。

註三、第三卷一四〇—一頁。

註四、第三卷一四一頁。

註五、第三卷一四一—二頁。

註六、第三卷一四二—三頁。

註七、リカルド、小泉信三譯『經濟學及び課税の原理』、岩波版一〇三頁、ゴッナー版、九八頁、獨譯九三頁、本文の譯は小泉氏による。

註八、資本論、第一卷、エンゲルス版、五六九頁、セワツキー版五四〇—一頁、邦譯高島、改造社版、五九三—四頁。尙

餘剩價值の上向傾向を示すものとしての本文の引用の當否は後に論ぜられる筈である。

註九、第三卷、一四三—四頁。

(五) 資本の再生産行程

資本が經濟過程、即ち生産行程と流通行程とを貫通して最初の出發點に復歸することは資本の再生産行程 (Reproduktion des Kapitals) と名附けられるのであるが、ゾムバルトはこれを三つに分類する。

(a) 單純再生産 (Einfache Reproduktion) これは同一組成に於ける同一資本額の再生産であつて、社會的所得の支出によつて生ずるものである。従つて、勞賃及び餘剩價值がそれ等の分け前になる所得財を購買するために支出せられることによつて全財の生産者は彼等の前貸資本額を填補するものである。

(b) 擴張再生産 (Erweiterte Reproduktion) これは同一資本額の再生産と追加資本の供給、かくして企業家の購買力の上向を意味するものである。

(c) 擴張された段階に於ける再生産 (Reproduktion auf erweiterter Stufenleiter) これは勞働手段の生産に投下せられた資本の相對的擴大を意味するものであるが、この擴大によつて社

會的生産力が上向されるものとするのである

ゴムバルトによれば、(b)と(c)とに於て示された再生産の形式は屢、混同せられて不明瞭となるのであつて、それらの相互關係に於ては多くはその歴史的獨立性、即ち、(b)は(c)なくとも、又(c)は(b)なくとも可能ではあるが、乍然、それにも拘らず概念的には尙嚴密に區別せらるべきである。けれども事實經驗的には兩者は密接に結合してゐるのであるが、彼はその結合の根據として次の三つのものを考へるのである。(註)

- (a) 生産手段機關が常にその價值を喪失して新しく、従つて自らより完全な方法を以て形成されねばならないといふことを伴ふ近代技術の革命的特性、
- (b) 近代技術の使用が生産手段機關の擴張を要求し、それによつて夫れ自體、既に勞働手段の生産に使用せられる資本の擴張が必要となること、
- (c) 個々の企業家が自由競争の下に置かれる、已むを得ざる逼迫狀態、

註、第三卷一四五—六頁

(六) 批判の一

以上吾々はゴムバルトの資本概念を彼の敘述を辿りつゝ觀てきたのであるが、この彼の

資本概念を批判した近著として、吾々はグロスの『ゾムバルトの近代資本主義の經濟理論的基礎』(Die wirtschaftstheoretischen Grundlagen des „Modernen Kapitalismus“ von Sombart)を見るのである。この書は著者自ら述べてゐる如く、リーフマンの立場からゾムバルトの體系を批判せむとするものであるが(註二)資本概念に就ては、ゾムバルトが基礎とする勞働價值説の採るべからざることを根據とするものであつて、從來諸家の勞働價值説に對して加へた批判を出づるものではない。

今、彼の論ずる處を聞けば、彼は先づゾムバルトの體系を紹介し、これに續いて、

『……ゾムバルトの勞働價值説は價格及び價格形成の本質に關する特殊の見解に基くものであつて、外形的に觸れ得る物財のみが本來的意味に於ける價格を得むとするものであり、……従つて、財を販賣すると共に企業家は該物財に潛伏せる勞働價值を手に入れるのであり、數量として理解された勞働支出が商品の交換價值を決定するのである』

『乍然、財の生産が人間精力の支出を必要ならしめるといふことは一の常套語である。けれども、企業家の命令によつて勞働者の生産する財の價格が所得財を『純粹數量』として理解することを可能ならしめる處の『望まれたる經濟的大きさ』を示すといふことは不思議である。同様に、ゾムバルトが何故社會的全勞働支出に價值といふ表現を與へるかといふ

ことは全く説明できないことである『註二』

と述ベズムバルトの勞働價值説を以て變體 (Transsubstantiation) に比較して、

『神學的思辨は聖餐式の祕密を „Substantia und Accidental“ の概念を借りて理解する。パンと葡萄酒とは神の本體の現象形態である。神の本體は永久的のもの、又不變的のものであるが、パンと葡萄酒とは神の本體の象徴以外の何物でもない。ズムバルトが所得財及び勞働支出を以て『純粹數量』として述べる場合、彼はかゝる神學の意味に於ける何等かの本體的なもの、即ち『勞働價值』を考へてゐるのである。パン及び葡萄酒の變體に於ては、恐らくパンの數量が如何にあるとも、又葡萄酒の種類が如何なるものであらうとも、それ等は全くどうでもよいやうに、本體たる勞働價值の數量も亦、強度を異にした且肉體的の勞働として、又異つた大きさの勞働支出として現はれ得るのである。

而して、實體と一定の象徴との同時的な觀念的な結合に於ける實體とその具體的象徴の間のこの不思議な非結合性こそ正に勞働價值説の本質的特徴である』(註三)

と勞働價值説の本質を明かにし、この論理的歸結として、

『…… 勞働量 (Arbeitsmenge) と勞働支出 (Arbeitsaufwand) とが分離せらるべきであるといふことを注意すれば、一つの財の價格は確かに交換價值を表現するものではあつても、その數

學的報告は恐らくはこの交換價值の高さではない。従つて、それは次の如く言はるべきである。即ち單なる數字としての價格(名目價格)も亦それが使用財である限り、物財と同様に本體たる勞働價值の祕密を現はさない。

かくて、勞働量は一定の表徴が選出される神祕的價值である。乍然、勞働支出、價格、物財は現實的本體としては把握されないのである』(註四)

乍然『純粹數量』として理解されたる勞働價值即ちグロスの所謂本體と、その具體的な感覺的な勞働の形象、即ち現象形態との關係を如何に見るか、は認識論上の問題であつて、グロスが批判せむとするものは勞働價值説一般に加へられたる批判を以て、直ちに其儘ゾムバルトの勞働價值説にあてはめむとすることであるが、それは到底不可能である。何故ならばゾムバルトが舊い古典派の勞働價值説をとると云ふものゝ、スミスの勞働價值説と、リカルドのそれ、或はマルクスのそれとは夫れぞれ非常に相異してゐることは、既にマルクスが餘剩價值學説史に於て詳細に取扱つてゐる處であり、従つてゾムバルトの繼承する勞働價值説も亦、その何れに屬するものであるかを明かにした後にあらざればゾムバルトの勞働價值説を批判したことにはならないからである。(註五)

次ぎにグロスは、勞働價值の祕義が行はれる形態を以て所謂 C-W-C' なる『魔術式』(Zeu-

berkeis)をとる資本主義的企業であるとして

『この變化の際にはそれは最も特徴的である。神學的變體が唯具體的な象徴(バンド葡萄酒とのみ關係するにも拘はらず、勞働價值は具體的な而も又抽象的な象徴で現はれやうとする。資本主義的價值増殖行程の端初及び結末には貨幣量があり、中間には使用された勞働力及び生産された財量がある。貨幣額及び財量は同資格のものとして並置される。而して若し吾々が資本、餘剩價值、貸銀基金の概念をよりよく觀察すれば、吾々はそれ等は一度は貨幣を、他は財を意味するを見る。これ等總べての概念はゾムバルトに従へば二義的に形成されてゐる』(註六)

『今や、吾々は資本主義的企業が物財を生産することによつて貨幣を資本とするか、若くは企業が物財を貨幣の大きさに對する量化過程(Quantifizierungsvorgang)によつて資本と呼ばれるやうにするかを知らない。何時資本が生れるか、即ち何時貨幣が生産の方へ進むか、若くは何時生産物が貨幣の方へ進むのであるか？ 吾々は少しも明瞭なる區別を得ないのである。

ゾムバルトは資本の下に一種のブランコ運動(Schaukelvorgang)を理解する。若しはりの一半が下にあれば(財の方面に於て)他の半分は上にある貨幣の方面に於て、若しブランコを

下から上へ、上から下へ動かすとも、その何れの場合にも搖れてゐるのである。財から貨幣へ、貨幣から財への兩方の場合をゾムバルトは資本と言ふのである』(註七)

註一、G. A. Gross: Die wirtschaftstheoretischen Grundlagen des „Moderne Kapitalismus“ von Sombart. Vorwort.

註二、前掲書九六頁。

註三、前掲書九七頁。

註四、前掲書九七頁。

註五、勞働價值説に關する種々の學說並にその相異に就ては別稿に於て論ずる積りである。

註六、前掲書九七—八頁。

註七、前掲書九八—九頁。

(七) 批判の二

惟ふに財が——資本主義的社會に於ては商品——二義的存在として現はれるといふことは『人間勞働の社會的性質をば、勞働生産物の對象的性質として勞働生産物の社會的な自然性質として見えしめ、斯くして亦總勞働に對する生産者の社會的關係をば、生産者の外部に存在する各對象間の社會的關係として見えしめるといふこと』(註一)によるのであつて、商品に具體化された勞働價值の根幹をなすものである。従つて今グロスが問題とす

る魔術式 *trick* に於ても『商品及び貨幣の各は價值それ自身の異つた存在様式として、即ち貨幣は價值の一般的存在様式として、商品はその特殊の謂はゞ假裝した存在様式として作用するに過ぎぬ。價值は絶えず一の形態から他の形態に推移して、而もこの運動のために失はれることがない。斯くして價值は、それ自身の運動を有する一の主體に轉化されるのである。自己増殖を遂げつゝある價值が、その生涯の循環中に交々採る特殊の現象諸形態を確かと摺むとき、資本は貨幣であり、資本は商品であるといふ命題が得られる』(註二) 従つて、グロスのゾムバルト批判は既に述べたる如く、何人の勞働價值説にも向けらるべき批判であり、唯だゾムバルトの説を借りて勞働價值説を批判せむとするものである。

吾々が本稿に於て取扱はむとするは、勞働價值説の基礎の上に形作られたる資本の『現象形態』、即ち資本の存在様式、運動形態に關する彼の論述の當否を検討せむとするにある。今吾々は彼の論述を追ふて之を見て行くであらう。

先づ、ゾムバルトが資本を分類するに當り、資本の現象形態に従つての分類を、他の資本形成の發展段階、及び資本の活動範圍に従つての分類と並置することは誤りである。何故ならば、彼は現實資本潛在資本、或は生産資本分配資本を以て他の部類に置いてゐるけれども、之等の形態も亦資本の現象形態であるが故である。或は感性的な物財に具體化された資

本を以て現象形態とすれば、それは彼の資本の定義と矛盾するのであり、更に、この現象形態を以て狹義の現象形態であるとすれば、然らば廣狹二義の現象形態に於て如何なる相異があるか、示されねばならないのであつて、従つて、彼の分類方法は一見精密なる如くにして實は然らざるの恨みなしとしないのである。

次に彼は人的資本と實質資本とを以てマルクスの可變資本、不變資本と同一職能をもつものとするのであるが、彼がこれと並んで、マルクスの否定する分類法、即ち固定資本と流動資本とを並置することは、單なる學問の羅列に止まるものであつて、反つて彼の推論の直線的進行を妨げるにすぎないのである。

而してこの批判は更に次の彼の分類にあてはまるのである。

彼は生産資本を以て、最廣義の物財生産、即ち經濟的循環を繼續せしむるに役立つものと、その投資領域に従つて幾多の資本形態を掲げるのであるが、この方法を以てすれば投資領域或は經濟面と同數の資本形態があり得るのであつて、これこそ正に現象、而も現象の末端を單純に羅列するものと言はざるを得ないのである。

今、ヅムバルトの表式を借用すれば、 $G-M-C$ が資本主義的企業の形式であり、而して資本主義經濟は價值増殖を決定的の目的とし、起動動機とするが故に、資本主義經濟とは $G-M$

$W-G'$ の無限循環と同義語であるが、この形態を以て直ちに社會的總資本の再生産行程の部分運動として見た個別的諸資本の循環の關聯、その現實的關聯を考察することは不可能である。何故ならば、社會の總資本が彼の表式の起點 G をとりとしても、それを以ては現實に $G-W-G'$ となり得ないからである。何故ならば、 G はその轉化の對象として W (然るに勞働價值説によれば、價值増殖は生産行程に於て行はれるが故に、生産手段及び勞働を示す) の存在を前提とせざるを得ないからである。然るに生産行程に於てその價值を増殖したる W は同時に亦その對象たるべき G の存在を前提せざるを得ないのであつて、從つて、 $G-W-G'$ の表式を可能ならしめるためには、常に G', W (即ち生産手段 P_m と勞働 A) との存在を前提とするのである。然るにこの存在も、若しそれ等が時を異にして存在する場合には $G-W-G'$ の推移を繼續せしむることは不可能であるが故に、而してゾムバルトが生産資本として列擧する諸種の資本の現象形態は $G-W-G'$ の表式の裡の何れかの地位に置かれたるものにならざるから、資本主義經濟を繼續せしむるものは單なる各種の資本の陳列ではなくして、 G', P_m 及び A の同時的存在といふ條件である。乍ら更にこの繼續が圓滑に行はれるためには $G \rightarrow W \rightarrow W' \rightarrow G'$ への推移が中絶されないことを前提としなければならぬのである。

かくして、個別的な各種資本の存在夫れ自體が資本主義經濟を繼續せしむるものではなく、それら各種資本間の關係を規定する諸條件が經濟を繼續せしめるのである。即ち、

『全體として見た資本は、空間的に相並んで同時にその各段階を占めてゐる。けれども、各部分は絶えず順次に一の段階、一の機能形態から、他の段階、他の機能形態に移動し、従つて順次に總べての段階の下に機能することになる。要するに、これ等の形態は流動的な形態であつて、その同時並存は逐次連續に依つて媒介されるのである。各形態は相互に隨伴し先行し合ふものであつて、一の資本部分が一の形態に復歸することは、他の資本部分が他の形態に復歸することゝ相須つてゐる。各部分は絶えず、それ自身の流通を通過してゐる。けれども、斯くの如き形態にあるものは常に資本の他の一部であつて、此等の特殊な諸流通は總經過の同時的な且つ逐次的な諸要素たるに過ぎぬのである。』(註三)

次に彼が餘剩價值の上向或は下向の傾向として、マルクスを以て樂觀主義的見解の代表者と見るは誤りである。

成程、マルクスは勞働生産力の上向を前提とし、『勞働の生産力が増進するにつれて、一定量の價值従つてまた一定の餘剩價值を代表する處の生産物量はますます大となつてくる餘剩價值の率に變化なき場合は勿論であるが、それが低下する場合と雖も、この低下が勞働

生産力の増進に比して緩慢であるとすれば、餘剰生産物の量は増大することになるのである。従つて、餘剰生産物を收入及び追加資本に分割する處の比率に變化なき限り、蓄積基金を減少せしむることなくして資本家の消費は増大せしめられ得ることになる。更に蓄積基金の比例的大きさは消費基金を犠牲としても増大せられ得る。蓋し勞働の生産力が増進して商品の價が安くなる結果、資本家は減少した消費基金を以てしても従前と等量又はより多量の享樂資料を支配し得ることになるからである。〔註四〕

と述べてをり、更に又他の個所では

『資本制生産が發達するにつれて利潤の量は、充用資本の量の増加と共に増大するが利潤の率はむしろ低下する。利潤の率が與へられてゐるとすれば、資本の絶對的増殖の大小は資本の既與の大小に懸る』〔註五〕

として餘剰價値の絶對的上向を肯定してはゐるけれども、資本自體の包含する制限によつて不可超限界に達することを結論する點に於て、而して又、一定の條件の下に於てのみ上向が可能であるとする條件付可能性としてこの傾向を認容する點に於て結局リカルドと同一結論に達するのではなからうか。〔註六〕即ち

『リカルドは利潤率低下の單なる可能に就ても、既に不安を感じたのであつたが、これ正に

彼れが資本制生産の諸條件について深き理解をもつてゐたことを示すものである。彼は資本制生産を考察するに當り、人類に頓着するところなく、専ら生産力の發展にのみ着眼し、それが人類及び資本價值を如何に犠牲として購はれるかを顧慮しなかつた、といふ非難を受けたが、これこそ、正に彼れに於ける注目すべき點なのである。社會的勞働の生産力を發展せしめることは、資本の歴史的任務であり、特權であつて、これに依つて資本は無意識の間に、より高級な生産形態の物質的諸條件を造り出す。リカルドに不安を感じしめたところのものは、資本制生産の刺激たると同時にまた蓄積の條件たり動力たる利潤率が生産の發展それ自身に依つて危險ならしめられるといふことであつた。〔註七〕

更にゾムバルトは餘剩價值の高さを決定する根據として掲げる三つのもの、即ち勞働の生産性、その強度及び勞働の經濟性が歴史的に變化する可變物であるとの理由を以て、一般的な發展傾向を設定し得ないとするのであるが、乍然既に可變物であることを認容するに於ては、更にこれ等三つのものを變化せしむるものを前提せざるを得ないのである。資本主義經濟をして資本主義經濟たらしむるもの、即ち資本の價值増殖と之等三つのものが如何なる關係に立つか、資本に對する關係に於て可變物が可變物たり得るのであるか、等々の問題を明かにすることに依つて、初めて資本主義經濟の全面的理解が可能となるのである。

と解すべきではなからうか。然らずして、若し資本の自己増殖と何等の關聯なく獨自の變化を経験する勞働概念を考へることは既に經濟の一要因として、又かゝるものとしてのみその存在理由を有つとする彼と矛盾するものではないであらうか。

従つて、餘剩價值の高さの向上下の傾向を見出す場合に、これら三つのものゝ結合關係を以て考察するよりも、むしろ資本夫れ自體の分析、運動形式の究明等より餘剩價值の高さの向上下の一般傾向を見むとする方がより科學的ではないであらうか。

最後に、ゾムバルトが再生産行程を分類するに當り、擴張再生産と、擴張された段階に於ける再生産とを區別することは、彼の長い説明あるにも拘はらず全く無意味である。

若し後者を以て勞働手段の生産に投下せられた資本の相對的擴大とすれば、前者に於てはかゝるものは含まれないのであらうか。

乍ら再生産行程が可能なるためには、一般に勞働力と勞働手段とは一定の割合を保たねばならないのであつて、再生産行程が擴張される場合と雖も勞働力と勞働手段とは夫れぞれ一定の比率を保つて擴張されねばならないのである。

勿論新しい勞働手段を以て舊い勞働手段と置きかへ、生産能力は増加したけれども、勞働力を要することに變化のない場合は有り得るのであるが、この場合、かくして生産せられた

財の増加分は更に分配せられ、而してそれは亦この生産に参加せしめられるのであるが、この場合には、既に見た如くこの生産を貫通する資本は、社會的總資本の部分資本としての個別的資本であることを必要とするが故に、各個別的資本間の均衡關係に影響せられて、必然的に勞働手段及び勞働力の絶對的又相對的變化を生ぜざるを得ないのである。

従つて、單に勞働手段に投下された資本のみの相對的擴大はあり得ないのであり、夫れ故、擴張再生産の一種をなすにすぎないのである。(註八)

註一、資本論 改造社版 第一卷四二頁。

註二、同書 第一卷 一二五頁。

註三、同書 第二卷 七五—六頁。

註四、同書 第一卷 五九三頁。

註五、同書 第三卷上 二二一頁。

註六、シヨパン『國民經濟學の危機』二—二頁參照。

註七、資本論 第三卷上 二二—二頁。

註八、ゾムバルトは高度資本主義に於ける再生産行程の歴史的研究に於て、唯だ貨幣資本と物財資本との再生産行程を取扱つてゐる。その根據に就ては、他日別稿に於て取扱ふ積りである。

尙、再生産行程の概念的研究は從來諸家によつて、繰返し試みられたものである。夫れ等を概觀することも他日に譲りたい。